

白石市文化財調査報告書第22集

梅田遺跡調査報告書

昭和59年3月

白石市教育委員会

梅田遺跡調査報告書

序

高速大量輸送の幕明けともいべき東北新幹線の開業を控え、新幹線白石藏王駅前の都市計画を伴う区画整備事業が実施されることになりました。この整備事業地内に白石市に残る梅田遺跡が含まれていたため、宮城県教育庁文化財保護課のご指導を受けて発掘調査を実施いたしました。

梅田遺跡は、昭和54年夏、白石市教育委員会によって一部調査が実施されており、住居跡が確認されておりました。

今回の調査は、宮城県教育庁文化財保護課のご指導のもと、白石市文化財保護委員会委員長中橋彰吾氏をはじめ、関係各位のご協力によって短期間の調査にもかかわらず、一応の成果を得ることができました。

これまで、当梅田遺跡は弥生時代から平安時代の遺物が発見されており、本調査によって古代の人々の生活や当地方の様相を解明する手がかりと、今後の調査研究資料を得たわけでもあります。今回ここに調査報告書を発刊するにあたり、本調査にご協力を賜りました関係各位に心から謝意を表し、ごあいさつといたします。

昭和59年3月

白石市教育委員会

教育長 鈴木五朔

目 次

序 文	白石市教育委員会教育長 鈴木 五朗
例 言	
調査実施要項	
I. 調査に至る経過	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の方法と概要	4
IV. 調査の成果	5
A. 基本層位	5
B. 発見された遺構と遺物	5
1. 積穴住居跡とその出土遺物	6
2. 掘立柱建物跡とその出土遺物	14
3. 土塙墓とその出土遺物	14
4. 土塙とその出土遺物	15
5. 溝とその出土遺物	16
6. 遺構以外の出土遺物	17
V. 出土遺物と遺構の考察	19
1. 出出土器の分類	19
2. 各遺構における出土土器の組み合わせとその年代	20
3. 遺構の年代と考察	23
VI. まとめ	23

例 言

1. 本書は、昭和54年度の第一次確認調査を受けて実施した、白石市大鷹沢三沢字桜田所在、梅田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査にあたり、宮城県教育庁文化財保護課、白石市文化財保護委員長中橋彰吾氏、同委員高橋辰男氏等の方々の指導、協力をいたしました。記して謝意を表する。
3. 土色は「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を、土性区分は国際土壤学会法の基準を参考したものである。
4. 本書において、出土遺物の実測、写真撮影は遠藤智が行い、土器復元については千葉典男が行った。執筆は遠藤智と清野俊太郎が分担して行った。編集は遠藤と清野が行い、中橋彰吾氏、太山昭夫氏、菊地逸夫氏から助言を受けた。

調査実施要項

遺跡名：梅田遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：02257）

遺跡記号：A B（白石市）

所在地：白石市大鷹沢三沢字桜田

調査対象面積：約20,000m²

発掘面積：約735m²

調査期間：昭和56年2月23日～3月31日

遺物整理期間：昭和56年3月7日～16日

調査主体者：白石市教育委員会

調査担当者：白石市教育委員会

調査指導：宮城県教育庁文化財保護課・白石市文化財保護委員長 中橋彰吾

調査員：白石市教育委員会社会教育課主事 清野俊太朗

調査補助員：白石市文化財保護委員 高橋辰男

◆ ◆ ◆ 福島大学 菊地逸夫、芳賀喜代次、斎藤義弘

調査協力者：白石市総務課主事 達藤 智

◆ ◆ ◆ 白石市都市計画課

調査参加者：佐藤藤吉、斎藤麻美、斎藤広子、菅野豪美子、佐藤美雪、高橋佳代子、佐藤富子、
梶川三郎、志村哲夫、志村健一、志村英子、三沢広子、高沼きよい、山田由佳里、
高橋 正、小野晃秀、岩山悦朗、中橋 康、重森泰志、斎藤久明、大友貞幸、
永井 哲、佐藤 晃、大越公郎、安斎彰剛、鈴木祐治、安倍智光、佐竹祐子、
猪野浩明、錦 健二

遺物整理参加者：山崎昭子、山田由佳里、斎藤広子、山崎幸男、佐竹祐子、菅野豪美子、
高橋峰子、斎藤麻美、山田礼子

I. 調査に至る経過

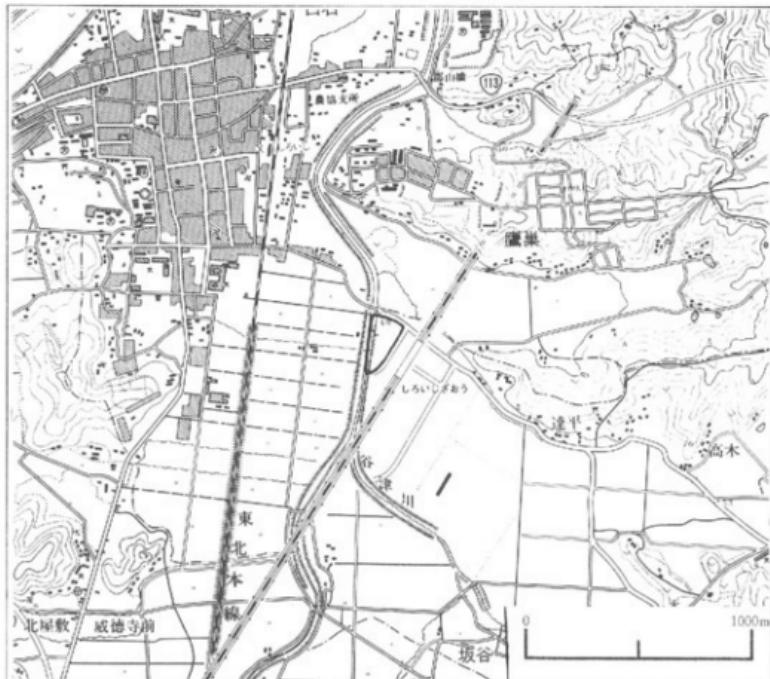
梅田遺跡は、白石市大鷹沢三沢字桜田に所在し、東北新幹線白石藏王駅より北西約200m、斎が川の東岸に位置している。

昭和17年10月、畑地の深掘りの際、上西新作氏が石包丁を発見している。また、昭和11年から23年まで行われた斎が川改修工事の際にも、流域や河川敷から多量の遺物が発見され、その名を知られるようになった。

その後、昭和46年10月、日本国有鉄道から東北新幹線の予定路線の発表があり、宮城県教育委員会では、予定路線の分布調査を実施した。

梅田遺跡は、予定路線に含まれなかつたが、その後、白石市では、将来の東北新幹線開通に向けて、新白石駅（仮称）前の区画整備事業に着手した。

白石市教育委員会では、区画整備内に遺跡が存在することから、市長部局と協議を重ねた結果、宮城県教育庁文化財保護課の指導を受けて、発掘調査を実施することになった。



第1図 梅田遺跡位置図

II. 遺跡の立地と環境

梅田遺跡は、白石市大鷹沢三沢字桜田に所在し、東北新幹線白石藏王駅より北西約200mの地点に位置している。

白石市の地形を概観すると、阿武隈山系の北端である東部丘陵帯、中央の盆地帯及び全市の3分の2を占める西部山地帯（奥羽山脈と藏王火山群）の3地域に分けられる。

東部丘陵帯は、阿武隈山系の西側支脈で、角田丘陵から北方に向かって延びてゆき、白石川を隔てて藏王町の猫田丘陵に続いている。西部山地帯は、奥羽山脈の東斜面、青麻山火山および南蔵王火山の南斜面にあたる。

盆地帯は、東部丘陵帯と西部山地帯とにはさまれた、南北約6.5km、東西約2.5kmほどの山間盆地である。盆地のほぼ中央を流れる斎が川は、越河盆地西縁に壇を発し、斎川地区付近から両岸に自然堤防を形成しながら北流し、盆地中央で谷津川と合流して鷹巣丘陵を避けて蛇行しながら、最終的に白石川に合流する。

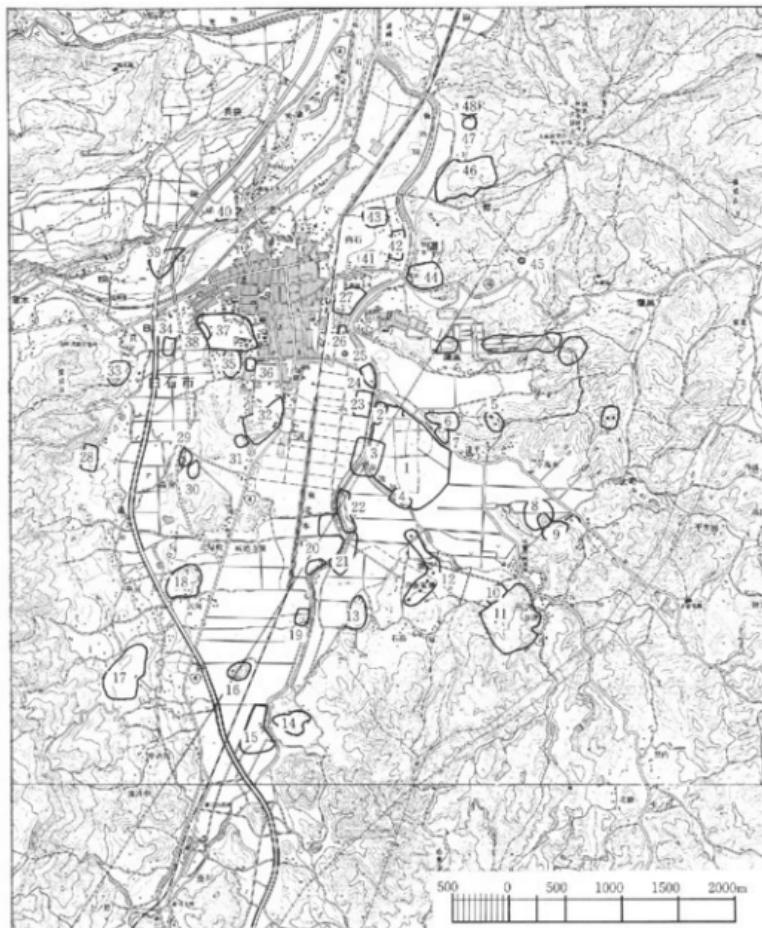
本遺跡は、斎が川が谷津川に合流し、鷹巣丘陵で蛇行する地点の東岸の微高地に立地している。標高約45mで、斎が川現河床からの比高は約4mである。

本遺跡の所在する白石市には、多くの遺跡が分布しており、現在まで確認された遺跡は約430を超える。

旧石器時代の遺跡は、標高100～200mの山間地帯に分布している。次の縄文時代になると遺跡数は多くなり、特に深谷地区に集中している。この地域は、藏王山東麓の台地で、児捨川、大太郎川を中心として形成された扇状地に立地しているのが多い。

弥生時代の遺跡は、22遺跡と少なく、むしろ大部分は藏王町の蔽川流域の沖積低地や深谷地区周辺の扇状地に立地している。一方、斎が川周辺の沖積低地への進出がみられ、大柳前遺跡、谷津川遺跡、大畑遺跡からは弥生式土器が、田中遺跡、梅田遺跡、弥陀内遺跡からは石包丁が発見されている。

古墳時代になると、遺跡の分布は松川、蔽川流域と斎が川流域の2つに中心が見い出される。大太郎川流域の扇状地から松川西岸の段丘は、急激に遺跡数が減少する。斎が川流域では、古墳と集落が知られている。東部丘陵から盆地内に突出する鷹巣丘陵には鷹巣古墳群が、斎が川上流には亀田古墳群が築造され、さらに縁辺部の低丘陵上に上蟹沢、塔ノ入、車丁、坂谷古墳群などの小円墳がみられ、郡山横穴墓ほか数群の横穴墓も存在している。集落跡としては、亀田西遺跡、谷津川遺跡、田中遺跡、北無双作遺跡、觀音崎遺跡、大畑遺跡が知られている。



- | | | | | |
|--------------|------------|--------------|-----------|------------|
| 1. 大鹿沢地区条里遺構 | 11. 三沢城跡 | 21. 二大橋遺跡 | 31. 新館西遺跡 | 41. 大畠遺跡 |
| 2. 梅山遺跡 | 12. 板谷古墳群 | 22. 田中遺跡 | 32. 新船跡 | 42. 観音崎遺跡 |
| 3. 谷津川遺跡 | 13. 久保沢山遺跡 | 23. 白石沖遺跡 | 33. 一本木遺跡 | 43. 弥陀内遺跡 |
| 4. 江ノ下遺跡 | 14. 亀田古墳群 | 24. 北無双作遺跡 | 34. 屋敷前遺跡 | 44. 莖鳥山遺跡 |
| 5. 鶴巣古墳群 | 15. 亀田西遺跡 | 25. 銚子ヶ森古墳 | 35. 元山遺跡 | 45. 上蟹沢古墳 |
| 6. 三島鶴跡 | 16. 坂詰遺跡 | 26. 銚子ヶ森敷石遺跡 | 36. 中寺前遺跡 | 46. 郡山城跡 |
| 7. 宮下遺跡 | 17. 赤嶺跡 | 27. 本郷遺跡 | 37. 白石城跡 | 47. 穴前遺跡 |
| 8. 塔ノ入遺跡 | 18. 太平館跡 | 28. 内田前遺跡 | 38. 蔵岡西遺跡 | 48. 郡山横穴墓群 |
| 9. 塔ノ入古墳 | 19. 才原遺跡 | 29. 横現山古墳群 | 39. 菅生田遺跡 | |
| 10. 五丁目遺跡 | 20. 大榔前遺跡 | 30. 上野原前遺跡 | 40. 陣場山船跡 | |

第2図 周辺の遺跡

III. 調査の方法と概要

遺跡内をほぼ南北に走る予定の6mの幹線道路の幅員を基準にして3mのグリッドを組んだ。地区名は南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字で表わし、両者の組み合せで呼ぶことにした。

発掘は、遺跡の基本層序、遺構の存在を確認しながら各グリッドを拡張して、遺構の集中している部分を中心に精査を行なった。

本調査区内の基本層位はほぼ一様な堆積状態を示しており、断面観察の結果、基本的に6枚の層が確認された。第Ⅰ層から第Ⅳ層までは、遺物の出土はあまり見られず、第V層と第VI層は、それぞれ、焼土並びに炭化物を含んでいる。第VI層上面から堅穴住居跡、掘立柱建物跡、土壤墓、土壤、溝などの遺構が確認されている。

調査の期間は昭和56年2月23日から昭和56年3月31日までである。発掘面積は約735m²である。調査の結果、堅穴住居跡3軒、土壤墓1基、掘立柱建物跡1棟、土壤4基の各遺構と土師器、須恵器、鐵器（鎌）、砾石、土製品（瓦）などの遺物が発見された。



第3図 調査区位置図

IV. 調査の成果

A. 基本層位

遺跡は斎が川が形成した自然堤防上に立地しており、第一次調査の際に表土下約50cmから厚さ140cm前後の細砂層が検出された地点があり、旧河道が複雑な形状を呈して遺跡を取り巻いていたと考えられる。本調査区の層位は調査面積が狭いこともあってほぼ一様な堆積状態を示している。断面観察の結果、基本的に6枚の層が確認された。

第Ⅰ層 灰褐色土層で畑地耕作土（表土）である。層の厚さは20~30cmで調査区東側で厚く堆積している。

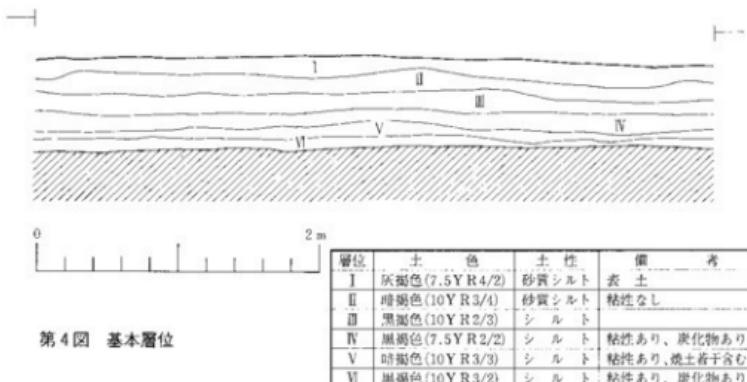
第Ⅱ層 暗褐色砂質シルト層である。

第Ⅲ層 黒褐色シルト層で調査区東側で30cm前後と厚く堆積している。

第Ⅳ層 黒褐色シルト層で、溝の一部がこの層の上面で確認されている。

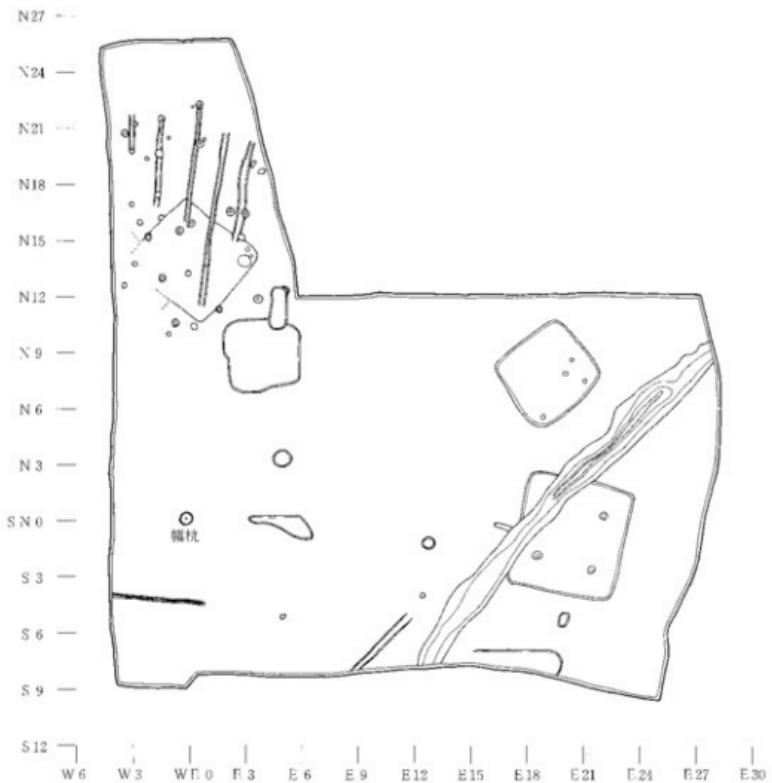
第Ⅴ層 焼土を含む暗褐色シルト層である。調査区全域に分布し、遺物包含層となっている。

第Ⅵ層 炭化物を含む黒褐色シルト層である。第Ⅶ層上面から竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壤墓、溝などの遺構が確認されている。V層同様に遺物包含層になっている。



B. 発見された遺構と遺物

本調査で発見された遺構は、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡1軒、土壤墓1基、土壤4基、溝状遺構、ピット多数などである。遺物は、住居跡内、その他の遺構から出土しており、土器はほとんど土師器である。



第5図 造構配置図

1. 竪穴住居跡とその出土遺物

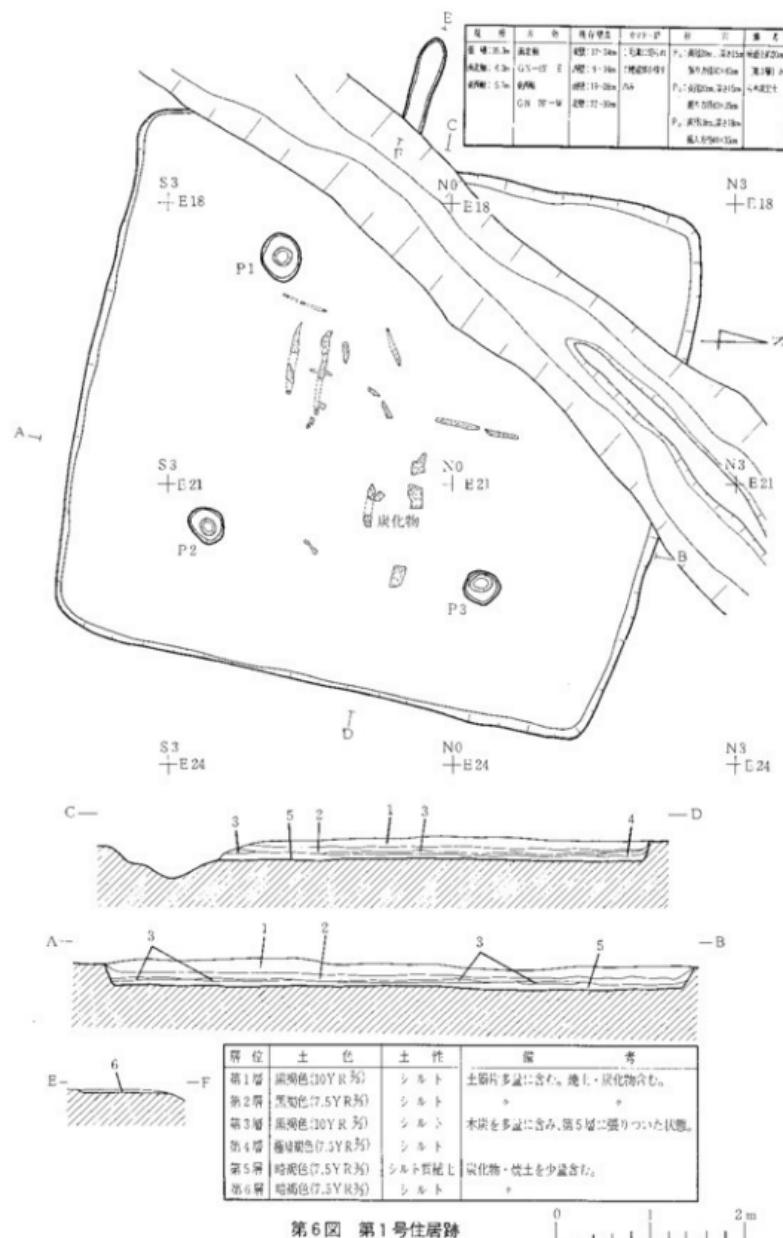
竪穴住居跡は3軒発見された。また、第3号住居跡に重複する造構が発見されたが、調査期間等の都合により精査はできなかった。

第1号住居跡

〔平面形・残存状況・重複〕 平面形は隅丸方形を基調としている。この第1号住居跡は、第1号溝と重複関係が認められ、後者によって切られている。

〔壁〕 壁の立ち上がりはゆるやかで、その上方は外傾気味である。

〔床面〕 住居床面は平坦である。



第6図 第1号住居跡

〔柱穴〕住居内で発見されたピットは3個で、これらのピットは柱穴と思われる。P 2の対角線上のピットは、第1号溝に切られたと推定される。

〔カマド〕カマドは、西壁のやや南側に設置されている。第1号溝によってその大半を切られており、煙道部を残すのみである。

〔堆積土〕住居内堆積土は、5層に分かれる。第1層より第3層まで黒褐色シルトである。第4層は極暗褐色シルトで、壁の崩壊土と思われる。第5層は暗褐色シルト質土である。なお、第3層から第5層上面にかけて、木炭が住居跡中央部より出土した。堆積状況は、水平状を示している。

〔出土遺物〕住居内堆積土のうち、第1・2層に遺物量が多く、下層及び床面には極端に少ない。復元資料は、土師器瓶口縁部破片1点、高環1点、砥石3点である。このうち、砥石は第1層より2点、第2層より1点出土しており、後者は木炭確認面とほぼ同一レベルで確認された。3は小形のもので、五面を使用している。4は大形のもので、肌理の細かいものである。両端に自然面を残し、六面を使用している。5は一面に自然面を残し、四面を使用している。材質は、4と同一と思われる。

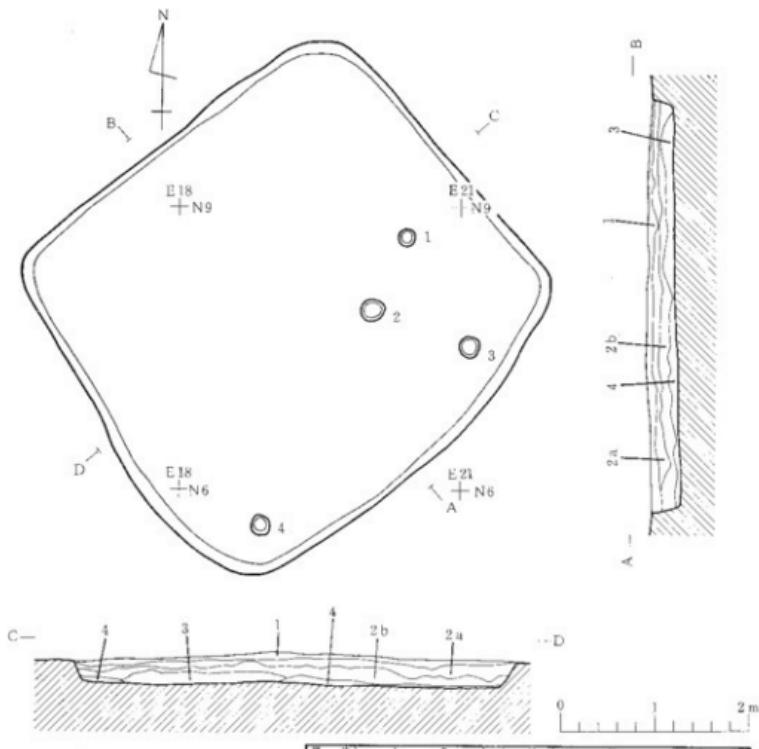


第7図 第1号住居跡出土遺物

番号	種類	層位	外 面	内 面	現存 分 類	登録番号
1	土師器瓶	第2層	口縁部：横ナメ 肩部：刷毛目	口縁部：横ナメ 肩部：ヘラナメ	焼	2往-1
2	土師器高环	第2層	环部：横ナメ 脚部：ヘラケメリ	脚部：ヘラケメリ 脚部：ナデツケ	高环C型	2往-2

番号	層位	石 材
3	第1層	玄武岩質輝石安山岩
4	第2層	矽酸鈣質磁化石
5	第1等	矽酸鈣質凝灰岩

砥石



第8図 第2号住居跡

第2号住居跡

〔平面形・残在状況〕 平面形は隅丸正方形を基調としている。

〔壁〕 壁の立ち上がりはゆるやかで、その上方は直線気味に立ち上がる。

〔床面〕 住居内床面は、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 住居内で検出されたピットは合計4個であるが、形態・規模・配置などの点で規則性がみられず、いずれも柱穴とは認め難い。

〔周溝・カマド〕 検出されなかった。

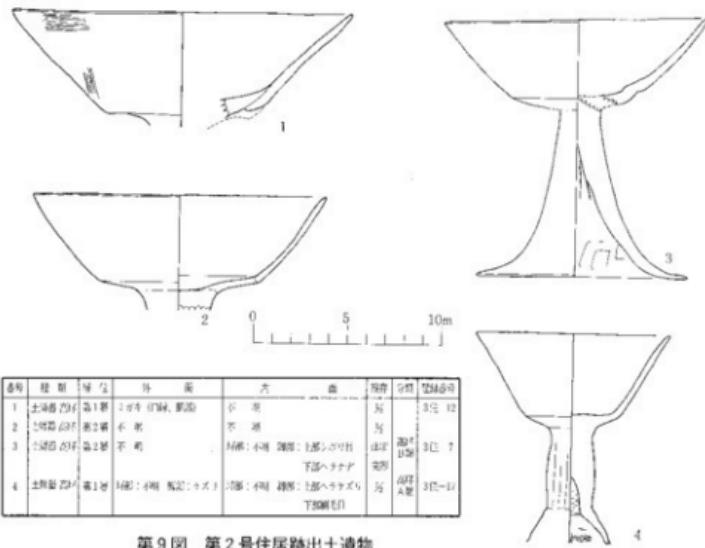
〔堆積土〕 住居内堆積土は4層に分かれ。第1層は暗褐色シルトである。第2層は2つに細分され、2a層は暗褐色シルト質土で、炭化物を多量に含む層であり、2b層は暗褐色シ

層位	土色	L	性質	備考
第1層	暗褐色2.5YR 7/0	シルト	土質片含み、炭化物・鐵土を僅かに含む。	
第2a層	暗褐色3.0Y R 5/3	シルト質土	炭化物多量に含み、高活性粘土含む。	
第2b層	暗褐色2.0Y R 5/7	シルト		
第3層	暗褐色2.0Y R 5/6	シルト質土		
第4層	二疊岩質褐色10YR 7/0	シルト		

層位	土色	堆積高	セグメント	測定	備考
第1層	暗褐色	高さ: 10~20cm	複数段階で分かれた。	A1 高さ: 10~15cm ★壁・底面付近とみた。	
第2a層	GR-5E	高さ: 20~30cm		B2 高さ: 20~25cm	
第2b層	GR-5E	高さ: 20~30cm		C2 高さ: 20~25cm	
	GR-5E-W	高さ: 20~30cm		D2 高さ: 20~25cm	

ルトである。第3層は黒褐色シルト質埴土、第4層はにほい黄褐色シルトである。堆積状況は、水平状を示している。

〔遺物の出土状況〕出土遺物は少なく、住居内堆積土（第1～2層）から土器高壙（復元資料4点）が出土しており、床面には遺物はほとんど検出されなかった。



第9図 第2号住居跡出土遺物

第3号住居跡

本住居跡は、造構確認面では平面形が検出できず、掘立柱建物跡の柱穴精査の際に柱穴底面より炭化物が検出されたため、確認面を掘り下げて発見されたもので、調査期間等の都合から十分な調査が出来なかつたが、検出された造構と遺物について可能な限り述べてみたい。

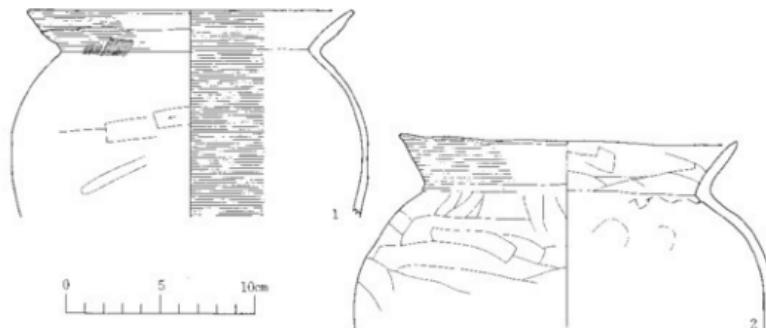
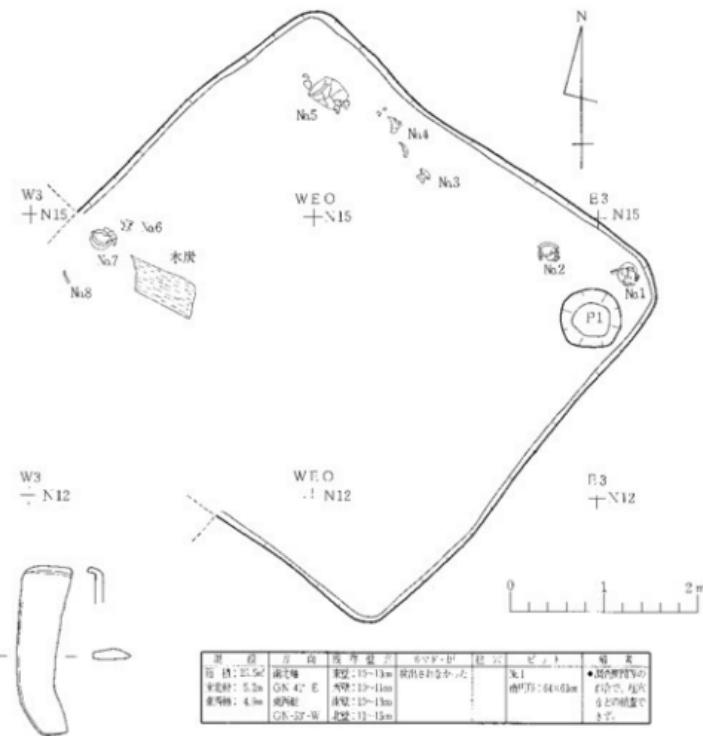
〔平面形・重複〕平面形は隅丸方形を基調としている。南西コーナーにおいて重複が認められたが、その新旧関係は不明である。住居跡確認面において、多量の木炭が南西部分を中心認められ、床面近くにまで及んでいる。

〔壁〕壁の立ち上がりは垂直に近く、壁高は10～15cmである。

〔床面〕住居床面は、ほぼ平坦である。

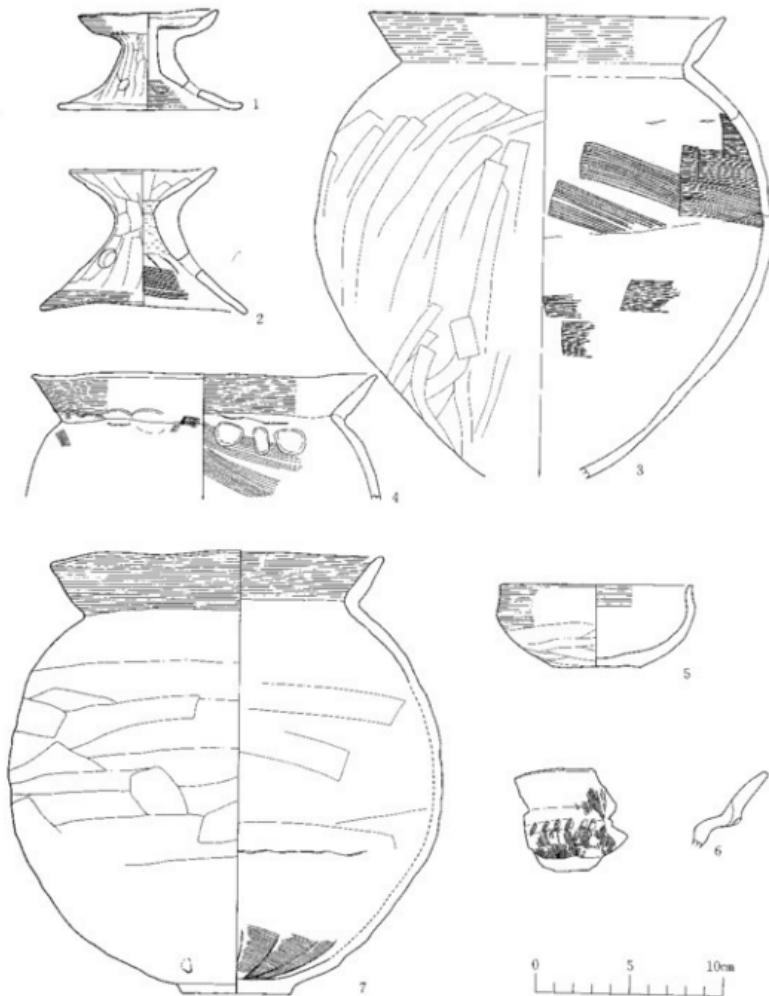
〔柱穴・ピット〕柱穴は精査できなかつたため、不明である。ピットは北東コーナーにおいて62×64cmの楕円形ピットが検出された。深さは22cmである。

〔出土遺物〕遺物は、北壁及び南西壁付近にまとめて出土している。住居床面から5～15



番号	種類	場所	外	内	残存部	登録番号
1	玉器石器	10壁: ハコナデ→ハラナデ 制部: ケズリ?型:	L壁: 制部: ハコナデ	15	4枚~8枚	
2	土器石器	10壁: ハコナデ 制部: ケズリ	10壁: ケズリ 制部: オサヌ→ナデ	36	4枚~8枚	

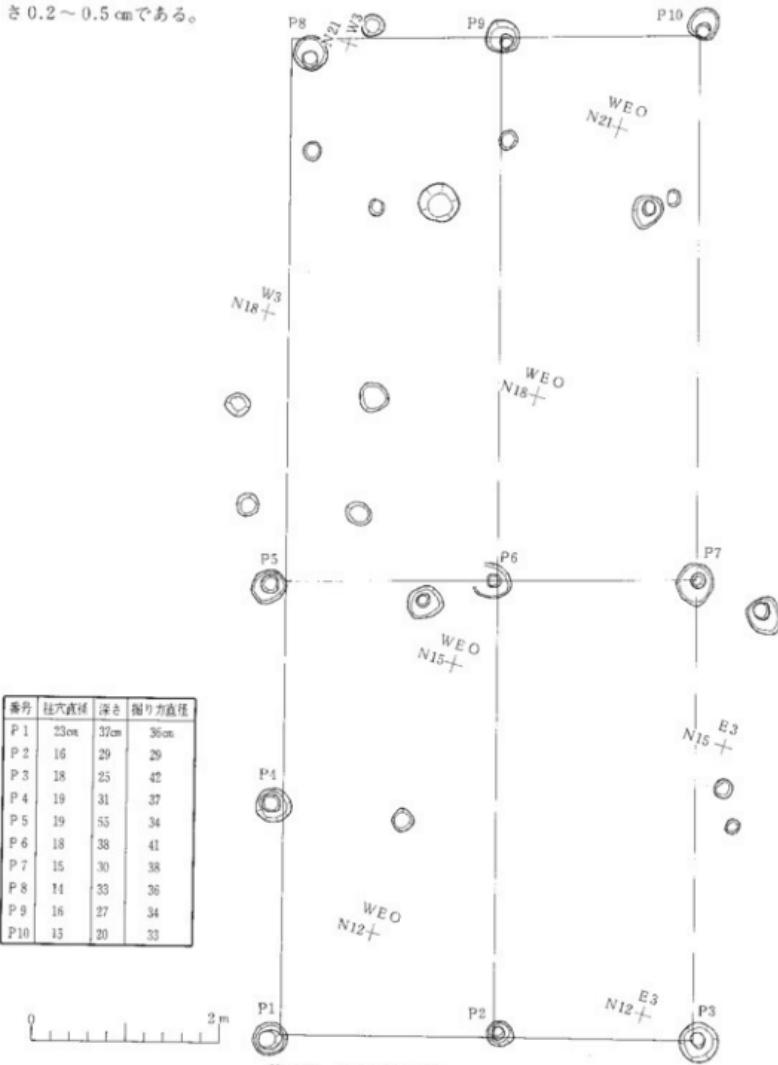
第10図 第3号住居跡・出土遺物①



第11図 第3号住居跡・出土遺物②

番号	種類	目	記号	外　面	内　面	説明	外　種	内　種	目録番号
1	土器部	器身	下部	口縁：テグス　腹面：上テグス	山形：テグス　底面：ヘラテグス　裏面：オナヌ→テグス	山形：テグス　底面：ヘラテグス　裏面：オナヌ→テグス	0件	0件	14-2
2	土器部	器身	中部	口縁：テグス　腹面：ヘラテグス　底面：ヘラテグス→ミカド	山形：ヘラテグス　腹面：ヘラテグス　底面：ミカド	山形：ヘラテグス　腹面：ヘラテグス　底面：ミカド	0件	0件	14-3
3	土器部	器身	上部	口縁：ミカド　腹面：ヘラテグス　底面：ヘラテグス	山形：ミカド　裏面：ヘラテグス	山形：ミカド　裏面：ヘラテグス	0件	0件	14-4
4	土器部	器身	中	口縁：ミカド　腹面：ヘラテグス　底面：ヘラテグス	山形：ミカド　裏面：ヘラテグス	山形：ミカド　裏面：ヘラテグス	0件	0件	14-5
5	土器部	器身	上	口縁：ミカド　腹面：ヘラテグス　底面：ヘラテグス	山形：ミカド　裏面：ヘラテグス	山形：ミカド　裏面：ヘラテグス	0件	0件	14-6
6	土器部	器身	上部	口縁：ミカド　腹面：ヘラテグス　底面：ヘラテグス	山形：ミカド　裏面：ヘラテグス	山形：ミカド　裏面：ヘラテグス	0件	0件	14-7
7	土器部	器身	下部	口縁：ミカド　腹面：ミカド　底面：ミカド	山形：ミカド　裏面：ミカド　底面：ミカド	山形：ミカド　裏面：ミカド　底面：ミカド	0件	0件	14-8

cmの堆積土中より土師器壺、器台、甕、壺口縁部破片、鎌が出土している。鎌は刃部と基部とからなり、基底部を斜めに折り曲げている。内湾刀で基部から刃部にかけてゆるやかに弯曲し刃部先端で強く内寄する。大きさは、長さ9cm、刃部幅1.7~2.1cm、基部幅2.4cm、棟の厚さ0.2~0.5cmである。



第12図 掘立柱建物跡

2. 掘立柱建物跡とその出土遺物

第1号掘立柱建物跡

調査区北西部分で検出された。畝状造構に切られる。規模は、調査区外に延びる可能性もあるため、明らかとは言えないが、二間×四間（東西4.51m、南北10.58m）である。柱穴の規模は、直径20cm前後のほぼ円形で、深さは確認面から25~55cmである。掘り方直徑は、30~40cm前後である。埋土は黒褐色シルトで、第1号溝堆積土第1層と類似した土色を呈している。遺物は検出されなかった。

3. 土壙墓とその出土遺物

第1号土壙墓

第1号土壙墓は、第1次調査時の第1号住居跡と重複し、それを切っている。平面形は長楕円形で、規模は南北軸0.8m、東西軸2.3m、深さ0.4mである。底面は、やや丸みを帯び、壁は垂直気味に立ち上がる。土壙墓内堆積土は4層に分かれる。第1層は黒褐色砂質シルト、第2層から第4層まで暗褐色シルトである。堆積状況は、凹レンズ状を呈している。出土遺物は、第1・2層に土器器が多く出土しており、両層の壁面は熱を受けて赤変している。堆積土中に含まれる炭化物、焼土は、第1層中に最も多く含み、壁面付近に集中する傾向にあり、下層になるにつれて少量化する。また、第3層中より少量の骨粉が検出され、第4層南西コーナー付近で上製丸玉1個が出土している。

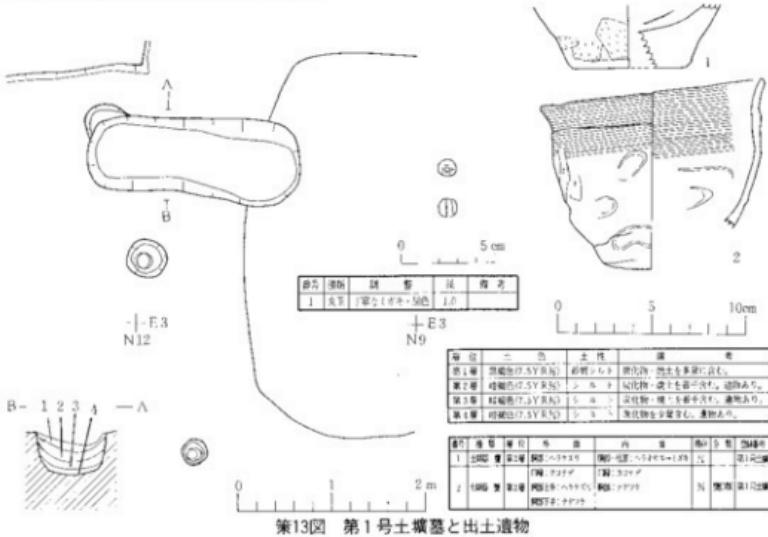


図13 第1号土壙墓と出土遺物

4. 土壌とその出土遺物

第1号土壌

平面形は歪んだ三角形で、規模は南北軸最大幅2.9m、東西軸最大幅1.2m、深さ0.14mである。土壌底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。土壌内堆積土は、2層に分かれる。第1層は炭化物を僅かに混入する黒褐色シルト、第2層は黒褐色シルトである。堆積状況は、水平状を示している。

第2号土壌

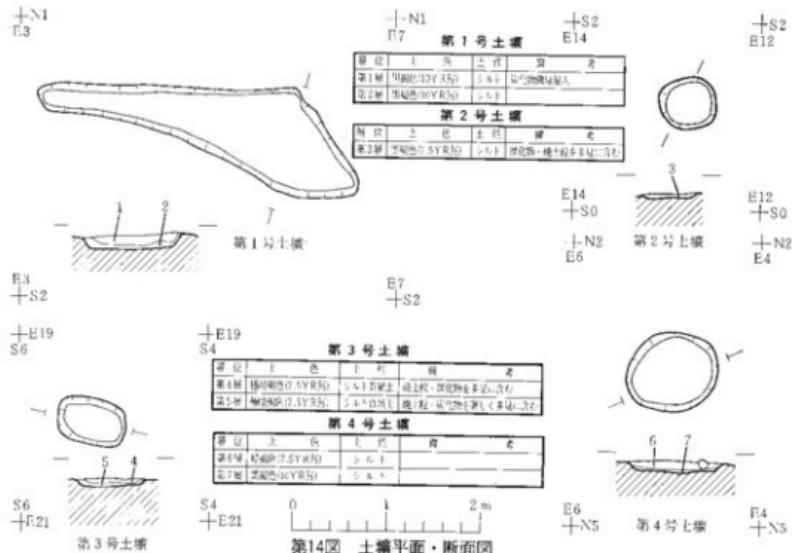
平面形は楕円形で、規模は $0.6 \times 0.6 \times 0.1m$ である。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。土壌内堆積土は1層で、炭化物、焼土を多量に含む黒褐色シルトである。

第3号土壌

平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸0.48m、東西軸0.74mである。底面はわずかに凹凸がある程度で、壁はゆるやかに立ち上がる。土壌内堆積土は2層あり、第1、2層とも極暗褐色シルト質粘土で、第2層がより焼土粒、炭化物を多く含んでいる。

第4号土壌

平面形は梢円形で、規模は $1.0 \times 0.86 \times 0.12m$ である。底面はやや凹凸があり、壁はゆるやかに立ち上がる。土壌内堆積土は2層あり、第1層は暗褐色シルト、第2層は黒褐色シルトで、その堆積状況は、水平状である。出土遺物は、いずれの土壌からも発見されなかった。



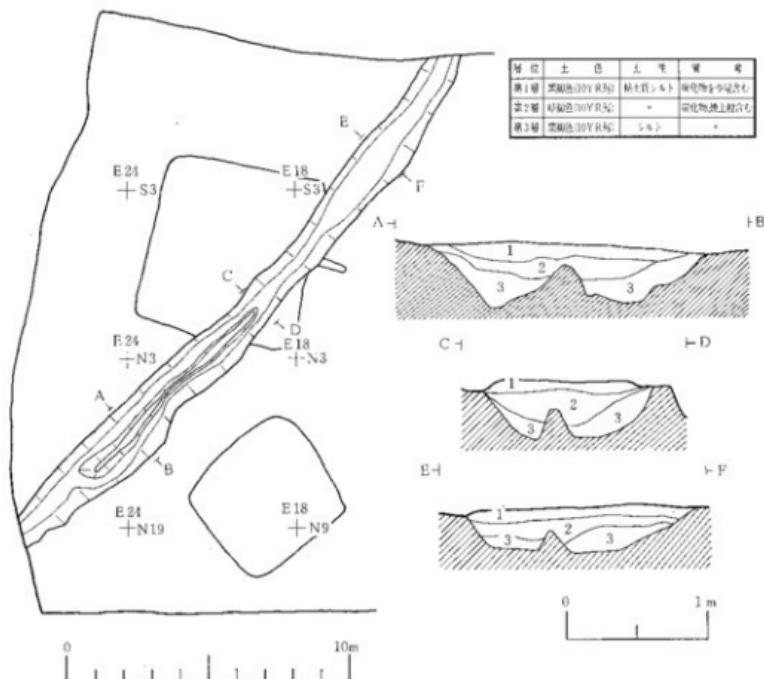
5. 溝とその出土遺物

第1号溝

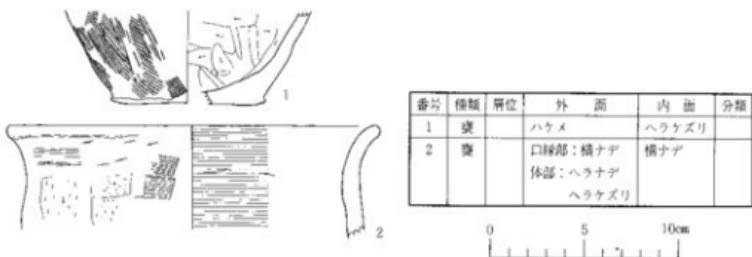
第1号溝は、調査区東側部分で検出された。溝の方向はC N -39° Eで、調査区外に延びるものと推定される。断面観察の結果、基本層位第V層上面から掘り込まれていた。第1号溝は、第1号住居跡と重複し、それを切っている。調査部分における溝の規模は、上端幅110 ~ 200 cm、下端幅30 ~ 170 cm、深さは27 ~ 65cmである。底面はほぼ平坦である。また、北東側においては、底面中央部が浮島状に盛り上っている部分がみられた。壁はゆるやかに立ち上がり、その上方は外傾している。その傾斜は東側が急で、西側はゆるやかである。

溝内堆積土は3層に分けられ、自然堆積である。第1層は黒褐色粘土質シルト、第2層は暗褐色粘土質シルト、第3層は黒褐色粘土である。

遺物は、土師器や須恵器が主に第1・2層から出土しているが、量は多くはない。出土状況に規則性はみられない。



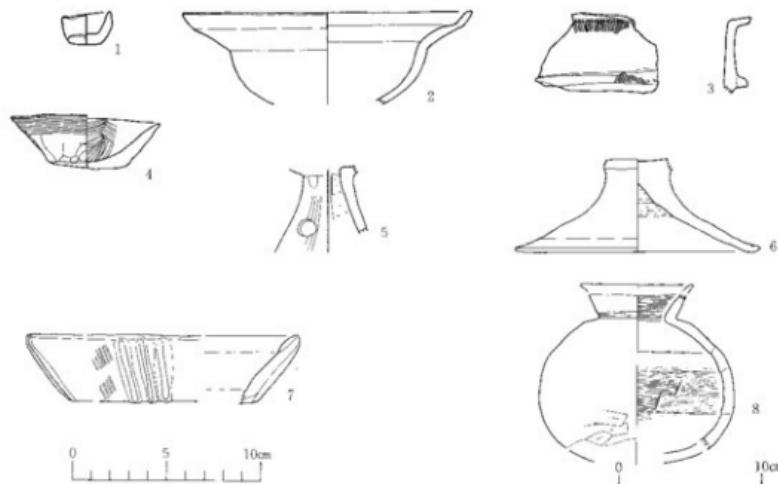
第15図 第1号溝平面・断面図



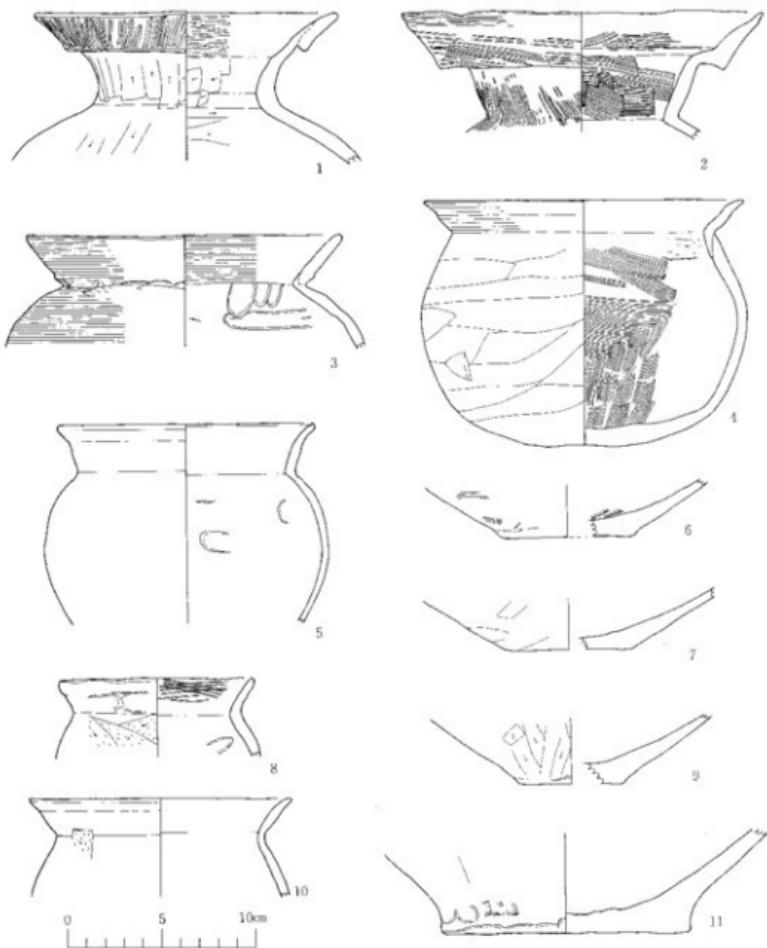
第16図 第1号溝出土遺物

6. 遺構以外の出土遺物

E 6～E 10、S 3～S 7 の地点で多量の土師器が検出された。出土層位は、基本層位第Ⅱ層である。調査当初は、住居跡と考えていたが、精査の段階で平面形を確認できず、その性格は不明である。



第17図 遺構以外の出土遺物 ①



番号	種類	部位	外	内	分類
1	土師器	灰	口縁: ヨコナダ→ヘラミガキ 口縁～側部: ヘラケズリ(横)	口縁: ヘラミガキ 口縁～側部: ヘラケズリ(横)	複A類
2	土師器	灰	口縁～瓶底: 刷毛目(口縁部にヨコナダ)	口縁～口縁: 刷毛目	複B類
3	土師器	灰	口縁～腹: ヨコナダ(口縁部にヘラ状オサニ)	口縁: ヨコナダ 腹: オサニ	
4	土師器	灰	口縁: ヨコナダ 刷一延: ヘラケズリ(横)	口縁: 不明 頸部、底: ヘラケズリ 刷毛目: ヘラナダ(横) 底下部: ヘラナダ(縦)	複C類
5	土師器	灰	不規	不規(頸部にマサニ根あり)	
6	土師器	灰	刷毛目	ヘラオサニ	
7	土師器	灰	ヘラケズリ	不規	
8	土師器	灰	口縁: オサニ→ヨコナダ 側: ヘラケズリ	口縁: 刷毛目 側: オサニ→オサニ	
9	土師器	灰	ヘラケズリ	不規	
10	土師器	灰	口縁: ヘラケズリ	不規	
11	土師器	灰	ヘラナダ	不規	

第18図 遺構以外の出土遺物 ②

V. 出土遺物と遺構の考察

1. 出土土器の分類

今回の調査における出土土器は、すべて土師器である。その器種には、壺、高壺、器台、壺、甌がある。このうち、壺、高壺、器台、壺、甌は形態的特徴及び製作技法の違いにより、分類することができる。以下の分類は、図示遺物のうち、全体の器形が比較的明らかで、かつ、遺存状態が良好以上のものを基本的に対象とした。しかし、口縁部破片であっても、七器の特徴的形態を明確に判別できるものについては、分類の対象に含めた。なお、これらの土師器には、ロクロを使用したものはみられなかった。

〔壺〕 内外面か、またはそのどちらかに稜や屈曲をもつもの（A類）と内外面ともに稜、屈曲をもたないもの（B類）に分けられ、前者はさらに2つに分類される。

A 1類—底部から口縁部にかけてゆるやかに彎曲し、口縁部で外反する。底部は平底である。器面調整は、口縁部は内外面とも横ナデ、体部から底部はヘラケズリである。（第11図5）

A 2類—体部と口縁部の二段にわたって稜、屈曲をもつ。体部は丸みを帯び、口縁部は外傾する。器面調整は、摩滅のため不明である。（第17図2）

B類—体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。器面調整は、外面は体部から底部にヘラケズリ、内面はヘラミガキである。（第17図4）

〔高壺〕 器形の違いから3類に分けられる。

A類—壺部は、底部から体部にかけて屈曲し、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。脚部は、柱状部が中膨らみしてほぼ直立し、裾部が外反している。器面調整は、脚部外面は柱状部が縱方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリ、裾部は刷毛目調整されている。（第9図4）

B類—壺部は、体部下端に棱をもち、やや丸味をもつて外傾する。脚部は、柱状部から裾部にかけて円錐状に開く。器面調整は、裾部内面がヘラケズリのほかは不明である。（第9図3）

C類—壺部は、底部から体部にかけて屈曲し、体部は外傾する。脚部は、柱状部上部から裾部にかけて円錐状に開く。A・B類より柱状部が短く、幅が広い。器面調整は、壺部外面が横ナデ、内面がヘラミガキで黒色処理が施されている。脚部外面は、柱状部がヘラケズリ、裾部が横ナデである。（第7図2）

〔壺〕 全体を知り得る土器は1点だけであるが、口縁部形態のちがいによって3類に分けられる。

A類—口縁部が複合口縁をなすものである。器形は、頸部で強く屈曲し、口縁部は外反する。器面調整は、外面は体部から複合部下までヘラケズリ、口縁複合部は横ナデの後ヘラミガキが

施されている。内面は体部から口頸部がヘラケズリ、口縁部はヘラミガキである。(第18図1)

B類一口縁部が有段口縁をなすものである。器形は、頸部から「く」の字状に屈曲し、口縁部に強い張り出し段をもちらながら外反し、口縁部はわずかに内傾する。器面調整は、外面が頸部から口縁端部まで刷毛目、有段部底及び口縁端部が横ナデである。内面は頸部より口縁部まで刷毛目調整である。(第18図2)

C類一口縁部が単口縁をなすものである。器形は、口縁部が直線的に外傾し、頸部が「く」の字状に屈曲し、体部は球形を呈する。器面調整は、外面は口縁部がナデ、体部がヘラケズリの後ナデである。内面はヘラナデである。(第17図8)

〔甕〕甕は出土土器の中でも最も多いが、全体を知り得るものはごく僅かである。最大径の位置及び器高との関連で4類に分けられる。

A類—最大径の位置が体部中央にあり、最大径が器高よりも小さいものである。器面調整は、内外面とも口縁部は横ナデ、体部はヘラケズリである。(第11図7)

B類—最大径の位置が体部中央より僅かに上にあり、最大径が器高よりも小さいものである。器面調整は、口縁部では内外面とも横ナデ、体部外面が縱方向のヘラケズリ、内面はヘラナデである。(第11図3)

C類—最大径の位置が体部中央と口縁部とでほぼ同一で、最大径が器高よりも大きいものである。底部は丸底状を呈している。器面調整は、外面は口縁部が横ナデ、体部から底部にかけてはヘラケズリである。内面は、頸部及び底部がヘラケズリ、体部がヘラナデである。(第18図4)

D類—最大径の位置が口縁部にあり、最大径が器高よりも大きいものである。内外面にナデツケ痕が多く見られ、一部は底部にまで及んでおり、凹凸がみられる。(第13図2)

〔器台〕全体の器形を知り得るものは、第3号住居跡から出土した2点だけであるが、器形や調整の違いで2類に分けられる。

A類—受部から脚部に通じる貫通孔が柱状をなすもので、受部は内弯しながら立ち上がり、脚部は裾に至って大きく開いている。器面調整は、受部は内外面とも横ナデ、脚部は外面が荒いヘラミガキ、内面がオサエ後ナデである。貫通孔への調整はみられない。(第11図1)

B類—受部から脚部に通じる貫通孔が外面形に沿って「く」の字状をなすもので、受部は直線的に開き、脚部はわずかに内弯しながら円錐台状に開いている。器面調整は、外面は受部から脚部裾までヘラケズリ、脚部端がヘラケズリの後横ナデである。内面は受部から脚上半部までヘラケズリである。(第11図2)

2. 各遺構における出土土器の組合せとその年代

出土した土器は、前項のとおり分類された。次に、住居跡その他の遺構の中でそれらがど

のような共伴関係、組み合せにあるかを検討してみたい。

第1号住居跡に確実に伴うと思われる住居内床面等出土の土器はみられない。僅かに住居内堆積土第2層より高環C類が検出されており、観音崎遺跡（白石市教委：1978）等の類似例から栗圓式と思われる。

第2号住居跡についても同様である。住居内堆積土第1層、第2層から高環A類、B類が検出されている。高環A類は、岩切鴻ノ巣遺跡（白鳥、加藤：1974）第II群土器の高環DⅠ類に類似しているが、环部及び脚下半部の形態に相違がみられる。B類は、高環DⅡ類に類似している。岩切鴻ノ巣第II群土器は、南小泉式に比定されており、高環A、B類も南小泉式に属するものと考えられる。

第3号住居跡出土土器には、環AⅠ類、甕A類、B類、器台A類、B類がある。これは、床面から5~15cmの堆積土中から検出され、北壁及び南西壁付近に集中して出土している。

環A類は、遠見塚古墳（結城・工藤：1979）第12トレンチ第III群土器に器形、器面調整の点で酷似している。第III群土器には、南小泉式と引田式とが混在しており、この様相は岩切鴻ノ巣の調査結果と同様である。岩切鴻ノ巣第II群土器については、「本群の土師器の中から引田式に類似する七器だけを抽出して分離することには、多くの無理がある。」として、「引田式類似のものも含めて、一括して南小泉式に位置づけるのが妥当と思われる。」としており、遠見塚の報告書においても、種々の問題提起を残しながらも南小泉式と報告している。したがって、環A類は現時点においては、南小泉式としておく。

甕は、A類と類似のものは留沼遺跡（手塚：1980）甕III類があり、体部にヘラケズリを施す点で共通する。B類は器形的には大橋遺跡（太田：1980）甕I-B2a類に類似するが、大橋のものは外面に刷毛目を施すのに対して、本類はヘラケズリを施す点に相違がみられる。

器台A類は、貫通孔が柱状を呈する点で鶴ノ丸遺跡（手塚：1980）、宇南遺跡（遊佐：1975）に類似しているが、脚部の開きやあいを比較すると、本遺跡のものの方が大きい。B類は、いわゆる鼓形を呈するもので、形態的には大橋のものと類似するが、丁寧なヘラミガキを受部外面と脚部外面に施し、器厚も薄く、本類のヘラケズリ調整とでは大きな相違がある。

以上、類似資料として取り上げた留沼、大橋、鶴ノ丸、宇南とも壇釜式に包括されるものであり、甕A類、B類、器台A類、B類も壇釜式のものと考えられる。

土壤墓からは、第2層から甕D類が出土しており、栗圓跡（仙台市教委：1979）出土土器に類似資料が認められる。栗圓跡の土師器は、氏家和典氏によって東北地方の土師器の編年における第V型式の標式資料とされ、栗圓式の型式名が提唱されている（氏家：1957）。したがって甕D類も栗圓式のものと考えられる。

次に、遺物集中個所から出土した土器について検討を加える。

环A2類は、大橋の环I-A2類に類似したものが認められる。

壺は、A類と類似のものが鶴ノ丸で認められるが、体部調整がヘラミガキである点が異なる。B類は有段口縁のもので、小牛田町山前遺跡（小牛田町教委：1976）、仙台市安久東遺跡（土岐山：1981）などに類例が認められる。また、有段口縁と思われる破片の中に、3本を1組とする縦位の棒状浮文上器や頸部に突帯がめぐらされた土器が出土している。その他、第3号住居跡堆積土中より有段口縁の有段部に櫛状工具による連續刺突がめぐらされた上器が出土しており、これら壺形上器の形態は塙釜式の中でも古い方に属するものと考えられている（氏家：1972）。C類は、岩切鴻ノ巣D I類に酷似、調整とともに類似しており、南小泉式に位置づけられる。

甕C類は、山王遺跡（高倉：1981）甕III類に器形、調整ともに類似している。山王遺跡では七器の分類のみを行い、造構、遺物の細部検討は後日報告するとして、古墳時代中期としている。したがって、本類は南小泉式に位置づけられる。

以上、出土土器の組み合わせとその年代について検討してきた。次に、本遺跡出土の塙釜式土器について、宮前遺跡（丹羽：1983）報告書で提起された塙釜式七器の時期区分との比較、検討を行い、塙釜式内の梅田遺跡の土器群の占める位置について若干の検討を加える。

宮前においては、塙釜式をA、B、Cの三つの土器群に分け、A群→C群へ移行する時期的な諸段階としている。その変遷過程で、「高環にあっては円窓の消失化、器台にあっては貫通孔と円窓の消失過程にあらわれている。…壺では複合口縁・有段口縁が次第に退化していく様子がうかがわれる。…甕は胴中央部に膨みと張りがあるものから、それが失われ、下膨らみのものへと変化する。そして、そのような器形変化に応じながら器面調整も変化し、刷毛目からヘラナデ・粗いヘラミガキのものへと変化する。」「そして、A群上器の壺頸部をめぐる刻目凸帯は弥生土器末期の壺にみられる口縁下部の刻目と通ずる要素をもっている。また、C群上器の高環にみられる円窓の消失化、壺にみられる複合口縁、有段口縁の退化現象、甕の下膨らみ胴部にみられる長胴化の傾向、そして器面調整のヘラナデや粗いヘラミガキの盛行は、南小泉式との連続性をうかがわせるに充分である。」としている。

これに本遺跡の出土土器を照合してみると、第3号住居跡出土の甕A類、B類、器台B類のヘラケズリ調整、及び器台A類の荒いヘラミガキ調整は、C群土器、特に留沼のものに共通する特徴を備えている。また、遺物集中個所出土の环A2類、甕A類、B類はA群土器の範疇に含まれる。したがって、甕A類、B類、器台A類、B類は塙釜式でも新しい段階と、环A2類、甕A類、B類は古い段階と理解しておきたい。

以上、出土七器の組み合わせとその年代について若干述べてみたが、未だ資料的に不充分なものもあり、今後の類似資料の増加を待って、更に検討を深めることが必要と思われる。

3. 遺構の年代と考察

梅田遺跡からは、今回の調査で住居跡、掘立柱建物跡、土壙墓、溝状遺構等が発見されている。それらは、出土土器の検討から古墳時代前期から古墳時代後期に位置づけられた。遺構から出土した土器に基づいて、その年代を推定してみたい。

第1号住居跡は、古墳時代後期（栗廻式期）と思われる。第2号住居跡は、確実に住居跡に伴う土器が出土していない。しかし、埋土中より古墳時代中期（南小泉式期）の高杯が出土しており、住居跡内にカマドが設置されていないことから、南小泉式期以後のものと推定される。

第3号住居跡は、古墳時代前期（塙釜式期）のものと思われる。掘立柱建物跡については、時期を決定できる遺物がなく、その年代は不明である。

土壙墓は、出土遺物から栗廻式期と推定される。第1号溝は、第1号住居跡を切っている。従って、古墳時代後期以降のものと思われる。

VII. ま　　と　　め

1. 梅田遺跡は斎が川によって形成された氾濫原および自然堤防上に立地している。
2. 検出された遺構としては、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡1軒、土壙墓1基、土壙4基、溝状遺構、ピット多数がある。
3. 出土遺物には、土師器、須恵器、小形手捏ね土器、鉄鎌、土製丸玉、砥石がある。土師器は古墳時代前期（塙釜式期）から古墳時代後期（栗廻式期）にかけてのものに比定される。
4. 以前、本遺跡から石包丁が発見されており、弥生時代から古墳時代までの長期間にわたって人々が生活していたことがわかる。
5. 遺跡の広がりは、西及び南東に延びる可能性が考えられる。

引用・参考文献

- 氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
- 氏家和典（1972）：「南奥羽地域における古代七師器をめぐって」『北奥古代文化』第4号
- 太田昭夫（1980）：「大橋遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第71集
- 小牛田町教委（1976）：「山前遺跡」
- 白鳥・加藤他（1974）：「岩切鴻ノ巣遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ」『宮城県文化財調査報告書』第35集
- 白石市（1976）：「白石市史別参考古資料篇」
- 白石市（1979）：「白石市史Ⅰ通史編」
- 白石市教委（1978）：「觀音崎遺跡」『白石市文化財報告書』第18集
- 仙台市教委（1982）：「栗遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第43集
- 高倉敏明（1981）：「山王遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』第2集
- 手塚均（1980）：「留沼遺跡—東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書』第65集
- 手塚均（1981）：「鶴ノ丸遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集
- 土岐山武（1981）：「安久東遺跡—東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第72集
- 丹羽茂（1983）：「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集
- 結城・上藤（1979）：「史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報」『仙台市文化財調査報告書』
- 遊佐五郎（1975）：「宇南遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書』第69集

写 真 図 版

遺跡遠景



遺跡近景



第1号住居跡



第2号住居跡



第3号住居跡



第3号住居跡
遺物出土状況



第3号住居跡
器台出土状况



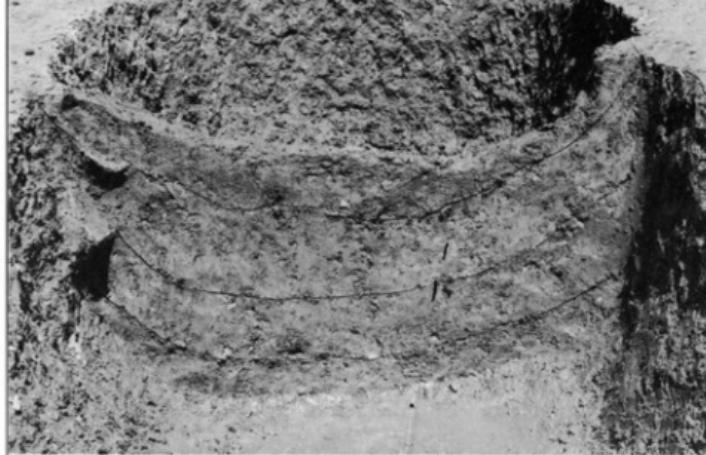
第3号住居跡
遺物出土状况



第1号土壤基

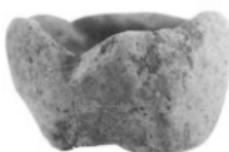


第1号土壤墓
堆积状况



第1号溝
堆积状况





第17図 1



第17図 7



第17図 4



第18図 4



第18図 3



第17図 8



第18図 2



第18図 1



第7図2



第7図5



第7図4



第7図3



第9図3



第9図2



第9図1



第9図4



第13図3



第13図2



第11図 5

第11図 2

第11図 1

第10図 1

第10図 1

第11図 3

第10図 3

白石市文化財調査報告書第22集

梅田遺跡調査報告書

昭和59年3月20日 印刷

昭和59年3月31日 発行

発行 白石市教育委員会
宮城県白石市字坂下小路35 TEL 5-2111

印刷 株式会社東北プリント
仙台市立町24-24 TEL (022) 63-1166

